

# 霧の烏来 うらい

陶 易 王

谷川の橋を渡ると、山道は登りになつて、車はそこで止まつてしまつた。

見ると、車の列がえんえんと渋滞して山の上まで行列している。

「今日は日曜だから行楽の車が混んでいるのかな」と運転の王君が言つた。

車で行けば歩くより楽だ、と思つたのが間違ひだつた。一時間以上のろろろ運転で、やっと目的地付近にたどり着いたが「烏来温泉」の大きな看板の駐車場も満杯で、車に入る余裕は全く無かつた。仕方なく今回は諦めて、烏来温泉の大きな看板の前をリターンして、又、渋滞の車の列に割り込んで、麓に下つた。

1949年1月、まだ医学生だつた私はマリア医療隊に参加させてもらひ、烏来の先住民タイヤル族の集落に赴いた。メンバーは台湾大学付属病院の医師、台

北保険館スタッフ、医学院学生ら数人である。未舗装の山道を軽トラックに揺られ、台北から一時間、道が殆ど尽きた所で車を降りた。ここから歩いて山道に入る。人が歩いて通つた道の西側は膝丈の草が汙々と生えて、踏み固められた急斜面の道が上へ続いてゆく。採血用器具、血圧計、聴診器、携帯顕微鏡、薬品などを箱に入れ、手分けして担いで登る。

集落は遥か山の中腹にある。天気は曇り、霧つばい、じつとりと汗が流れる。途中で何回か休憩し、昏過ぎにやっと部落に着いた。案内人が広場の真ん中で医師が来た！と大声で叫ぶ。

各家からそろそろと住民が現れた。中肉中背で、顔は浅黒い。洗いだらしの兵隊服に戦闘帽をかぶつた男も居る。足には旧日本軍の兵隊靴を履いている。あまり敏捷そうではない。

広場に積み上げられた医療器具や薬の入つた段ボール箱を、集会所に運び入れる。女性たちもそろそろ出てきた。戦後

間もないから、地味なブラウスにモンペをはいている。

男たちは一見漢族とさして変わりないが、女性たちは南方系で目が大きく窪んでいる。

子供らは裸足が多い。彼らの言葉は中国語でもない、日本語でもない別系統の言葉で、流れる様に話す。滑らかな言葉で東南アジア諸島の言葉と源を同じくしているらしい。

人類学者は、オーストロネシアと称しているようだ。日本統治からまだ日にちが経つていないから、皆、日本語を上手に話す。診療を始める。診察も採血検査も特に嫌がらない。

ここはマリアしようけつ地であるから住民は大人も子供もみな、一応はマリアの洗礼を受けているらしい。腹部を触診すると、脾臓が腫れている人が多い。子供らは大きなお腹に触ると擦つたがつてきやあ、きやあと笑つた。子供らは朗らかに明るい。

マラリア検診が終わって、一般患者も診察する。特別な病気はなさそうだ。

夕食後、民族衣装で美々しく飾った女性たちが輪になって踊ってくれた。皆美人でシャイな人たちだ。歌を教えて貰ったが、談笑する機会はなかった。

近くの谷川の清流は冷たくて顔を洗つと気持ちがいい。アノフェレスは家蚊キユレックスと違って、この様な清流に育つそつである。夜、上が丸い小さな蚊帳に学生5人が、頭を中心に入り足に布団をかけて寝た。下半身は蚊の攻撃から守れるつもりだったが、朝になって寝相の悪い男は蚊帳からはみ出して無防備に手足を蚊に食われていた。彼らは青くなつて、予防薬を飲んでた。蚊は人の呼気に含まれる炭酸ガスを感知して襲つてくる。

翌日、村人の見送りに手を振つて、山道を下つた。霧が濃く立ち込めていた。快い疲労感が全身の筋肉をリラククスさせていた。

( 廣 告 )

癒しの美術館 地域の文化交流に貢献

## シラヤアートスペース

「シラヤアートスペース」は西武新宿線 小平駅前（徒歩1分）にある白矢眼科医院に併設するギャラリーです。2006年5月にオープンしました。開設の目的として

- ・ 地域の人々の交流の場・患者さんの眼の健康（保養・憩い）
- ・ 新しい芸術家の発表の機会となる を目指しています。



これまでも医家芸術の写真展を2回、岩瀬光先生の個展、白矢勝一院長ら当地区の会員らによる美術と音楽のコラボレーションなど、年間を通じ多数のイベントが展開されています。

ことしの5月21日から31日まで「初夏の芸術祭」を開きました。期間中にダンス公演やショパンの曲とともにジョルジュ・サントの作品朗読会など、背景の絵画とともに賑やかに開かれました。写真は医家芸術洋楽部有志らによるコーラスです。  
〒187-0041 東京都小平市美園町1-4-12 tel 042-341-0235  
<http://www7.ocn.ne.jp/~shiraya/artspace.html>